ICT 海外ボランティア会会報
No. 89

2019 年 12 月 13 日（金）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
日本人なら、古事記を読もう！
当会特別顧問　宮村　智氏

◆特別寄稿
徒然日記(6)
当会特別顧問　石井　孝氏

◆海外実践マネジメント
今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(13)
元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現(株)ハイホーCEO　鈴木　武人氏

◆海外グラフィティ
「酒と旅と人生と」を読んで
「ベトナム残留日本兵家族の旅」を観て
宮沢賢治と俳句
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆海外便り
ノルウェー俳柳紀行(3)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之氏

◆第 42 回海外情報談話会模様　事務局

特別寄稿

日本人なら、古事記を読もう！

当会特別顧問　宮村　智

今年は新天皇が即位され、万世一系で 126 代、少なくとも 1700～1800 年は続いている日本の天皇制の長い歴史を改めて内外に知らしめることになった。「即位礼正殿の儀」においては、天孫降臨神話に由来する高御座や三種の神器なども使用され、天皇制が神話時代に遡る歴史を有することも示された。海外のマスコミの中には、日本の天皇制の長い歴史を驚きや羨望を込めて報じているものもあり、私自身は少しばかり誇らしく感じた。

このように神話にまで遡ることができる日本国や天皇制の初期の時代の歴史を記したのが、712 年に編纂された日本最古の歴史書「古事記」である。古事記は正に「日本建国の書」と言える。建国の書なら広く国民に読まれて良い筈であるが、古事記については戦前その官製版とも言える「日本書紀」（両者を併せて「記紀」と呼ばれる）とともに、軍事政権によって国粋主義教育に悪用されたので、GHQ 主導で改革された戦後教育の下では有害図書のような扱いを受けることとなった。このため、古事記を学校教育で教えるのは勿論、戦後暫くの間は、読むことすら憚られる風潮が広がった。この影響もあってか、今なお古事記を敬遠する傾向が残っており、古事記をきちんと読んだ日本人は少ないようである。

私はこうした状況を残念に思い、日本人は建国の歴史をよく知らないので、建国から続く長い歴史を誇る天皇制が存在するにも拘らず、自国を評価する国民の割合が低いのではないかと推測している(注)。私自身は幸いにも古事記研究の専門家である三浦佑之氏を講師として、仲間と一緒に古事記を完読するという機会を持つことができた。また、その機会に、世界各国で建国の歴史がどう扱われているかもざっと調べてみた。これらの知識や体験を踏まえて、本稿では、日本人が古事記を読む必要性を訴えることとしたい。

(注)英国 BBC 放送の 2013 年の調査によれば、自国を評価する国民の割合は日本では 4 割程度に過ぎず、他の 24 か国の 6～8 割に比べて、極端に低い。

私の調べによれば、世界の殆どの国では自国の建国の歴史を子供の頃から学校教育で教えている。これに加えて、教会などの宗教施設や家庭でも教えている場合も多い。このため、国民の多くは自国の建国の歴史をよく知っており、その歴史を誇りに思い、その知識を国民全体が共有し、国民としての一体感や愛国心が自然に培われている。そして、米国などの新しい国は別にして、長い歴史を有する国々では、建国神話にまで溯って、そうした教育が行われているようである。

このように述べると、神話は事実でない非科学的な話なので、学校で教えるのは適当ではないという意見を出て来よう。しかし、神話は全くの絵空事ではなく、長く人々の間で伝承されてきた話を取り纏めたものであり、考古学の発掘や歴史的な検証によって事実と確認された話も少なくない。古事記研究家の竹田恒泰氏は「神話は必ずしも事実とは限らないが、民族の精神を担保する真実である」と述べている。これは言い得て妙な意見であって、神話は事実とは言い難くとも、それぞれの国民が固く信じ、誇りや精神の拠り所としているような神話は真実として尊重されるべきとの考えであると思う。

各国の建国神話を調べると、その筋書きは、天上や異郷の地から訪れた、あるいは神

の子とか卵から生まれたといった通常の人間とは異なる出生譚をもつ英雄が、様々な困難を神の助けや奇跡によって克服し、国を創り、人々を治めるようになったというのが一般的である。日本の建国者である神武天皇の出生譚や東征伝説も正にこの筋書きに沿ったものとなっている。他方、現在の日本史教育では、神武天皇は一切登場せず、狩猟・採集の縄文時代、水稲耕作の弥生時代を経て、部落国家が成立し、部落の統合が進んで古代国家が形成されたと教えられる。私には、このような説明が国民に誇りを感じさせる日本建国の歴史であるとは到底思えない。建国神話には、祖先は神である神武天皇のような建国者とか、日本統一のために大活躍をする悲劇の英雄ヤマトタケルのような登場人物が必要であり、それだから国民が誇りや愛国心を持てる建国の歴史になると信じる。

ということで、私は日本史でなく他の科目でもよいので、学校教育で古事記を教えるべきであると考える。しかし、この提案はすぐには採用されそうもないので、当面は未だ古事記を通読したことがない方々に是非とも古事記を読んで、日本の建国の歴史を知り、日本に誇りや健全な愛国心を持ってほしいと願っている。古事記は官製の日本書紀と異なり、反国家的・反体制的な話も含めて、面白い話が沢山登場する。ワクワク・ドキドキと胸を躍らせながら、日本建国の歴史を学ぶのは、きっと楽しい体験になると思う。

最後に、この機会に古事記を読んでみたいと考える方々のために、3 点ほどアドバイスしておきたい。①どの本を読むかについては、原文やその読み下し文を講師なしで読むのは困難なので、読みやすい口語訳や現代語の本がお勧めである。②古事記では、神様がうんざりするほど沢山登場するが、大事な神様は限られているので、神様の名前は覚えようとしない方が良い。③（日本書紀の編纂者が）初代の神武天皇の即位年を中国の讖緯説を勘案して辛酉の年（BC660）と定めたため、実際は 2～3 世紀と推定される初代天皇の即位年より 900 年前後前倒しとなっている。このため、初期の天皇の人数とか年齢をより大きくして、つじつま合わせが行われている可能性が極めて強い。これは対外的に見栄を張って即位年を決めたと考え、割引いて読んでほしい。（以上）

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

特別寄稿

徒然日記(6)

当会特別顧問　石井　孝

「番茶の出涸らし」

宇江佐真理と重松清の小説を読んでふと思ったことがある。両者の作品は、口あたりで言うなら、カツ丼とカレーライスほどの違いがあるが、後を引く味がある。

プロと言われる人が書くモノは、読む者にとって美味い、不味い、色々あるが、とに角「味」がある。所が、小生のようなド素人が綴る文章には味と言うなら「番茶の出涸らし」のようなモノだ。それが分かっていながら、敢えて書く。失礼の段は平にご容赦頂きたい。

「死ぬということ（生きるということ）」

重松清の連作短編集「その日のまえに」を読んだ。年を取って弱って来た涙腺を刺激する所にも、しばしば遭遇するが、人生をあらためて見つめ直し、問い直す作品であった。

「食わず嫌い」

無知の偏見か、ずっと、現代の若い作家に比べ、自分より年配の作家の小説の方が、重厚感があるのではないかと、何とはなしに思っていた。

新潮文庫 100 冊のおかげというか、手引きで現代作家の作品も読むようになった。

宮本輝の「蛍川・泥の河」、伊坂幸太郎の「SOS の猿」、荻原浩の「愛しの座敷わらし」を続け様に読んでみた。

「蛍川・泥の河」は芥川賞並びに太宰治賞受賞作だけに、如何にも純文学の格調が漂っていた。「SOS の猿」は些か奇想天外である。「愛しの座敷わらし」は、発想にアッと思わせる才能を感じさせられる。

何れも時代背景が「今」なので分かりやすく且つ大変面白い。食わず嫌いであった事が後悔される。

「いじめ」

重松清の短編集に「ナイフ」という作品がある。小中学生の「いじめ」を扱った小説である。

何とも切ない物語であるが、それはそれで面白いというか、色々と考えさせられる。

これを読んで、何故か、今は亡き親しかった友人の事を思い起こした。彼も勤め先で「いじめ」にあった。会社の中の「いじめ」にも色々あるが、彼の場合は徹底的に「干された」のである。

ある職場に異動直後、上司と意見が合わず、大喧嘩をしたのだから無理も無かったのかもしれない。彼は、正義漢ではあったが、どちらかというと温厚な性格であったから、余程の事があったのだろう。

だがその後、彼が、本当に頭に来たのは、その上司が部下の女性を弄んだあげく、部下でおとなしい男に、彼女をうまいこと連れ添わさせて、けりをつけてしまった、その遣り口であった。
その上司はある意味で、とても利口で、きわめて要領を心得た人で、かなりの地位にまで昇進したそうである。
私の友人は、己の会社は自分にとっては勿体無いぐらい立派な所ではないかと信じ、何か「会社に負けて居る」気分がずっとしていたそうだが、この上司の人事を観て、遅ればせながらそんな想いが一気に吹っ切れたそうである。
彼は、干され終いで、退職かと観念していたが、思いがけない僥倖に恵まれ生き延びる機会を与えられた。
其処で、彼は、気分を新たにし、人が変わったように、言いたいことは言い、やりたい事を遠慮なくやってのけ、結構な業績を挙げたそうである。
「石井、お前も細かいことにくよくよせず、いい子ぶりっ子は止して、思い切って頑張ってみろ」とよく発破をかけられたが、根性無しの小生は残念ながら、酷い「いじめ」も受けないかわりに何も秀でた事は出来なかった。

「老いる」

定年で職を離れ、元気であったので、ボランティアまがいの仕事を続けた。はじめの頃は、まだまだ十分やれるではないかと思ったが、そのうち体力に自信がもてなくなり、はた迷惑になってはいけないと感じ辞めて、家にこもった。
「悠々自適」とはこんな心境かなどと、暫らくは些か満足な気分を味わったが、この頃は「悠々自適」ではなく、「無為徒食」の毎日ではないかと疑念を持つようになった。
これから先を思うと、医薬や医療の進歩も手放しで喜べない気がする。

「ＩＣＴにおけるソフトウエアについて」

はじめに
先般の議論の中で、前川様の「笛吹けど、踊らず」のご指摘は、実に考えさせられる点が多かった。よく反芻してみると、実は踊れない事情があるのではないか、と思える節がある。
結論から先に言うと、わが国におけるリーダー層のソフトウエアに対する認識不足と、これから派生するソフトウエア産業の脆弱性である。
前世紀後半から今世紀の世界は、社会の隅々に至るあらゆる所にコンピュータ素子が入り込み、それらをＩＣＴと云うネットワーク化技術によって有機的に統・結合し、これが社会生活の基盤（インフラ）を形成する時代になった。言うまでも無いが、このインフラ機能はソフトウエアによって実現される。しかしながら、この事実に対する基本認識が実に甘いと云わざるを得ない。
公共的性格を持つインフラが、社会の進展にフォローしながら成長・拡大し、常時、有効かつ安全に機能して行くためには、持続的で万全なソフトウエアに対する維持・管理を含めたソフトウエア開発体制が不可欠である。
このためには、政府をはじめとする公共機関は只単に全てを民間に委ねるのではなく、公共機関自身が責任を持って実行・管理する必要がある。
先ずは、こした体制を確り構築した上でないと、ICT 国際戦略の遂行も覚束ないのではなかろうか。
そこで、このような視点から、わが国に置けるソフトウエアの現状と問題点等について私見を述べる。

１．　ソフトウエアと云う物

ソフトウエアに関する議論を進めるに当たり、ソフトウエアに対する基本的認識（多分に自己流）を明らかにして置きたい。

（１）完全な人工論理

ソフトの性質をハードと対比する。ハードの場合は、基本的に神が創造した物質との関わりが不可欠であるためか、既成の物性論などでは説明の出来ない不思議な現象（触媒作用など）を製造過程に応用するとか、工作面では神業などといわれる職人芸が必要となる場合が多々ある。このため、「ものづくり」を極めるためには相当の時間と経験の積み重ねが必要である。

これに対しソフトは、全てが人工的論理の組み合わせで、不思議な世界などとは全く対極にある。やる気さえあれば、紙と鉛筆で誰にでも直ぐ創れる、昨今では、紙と鉛筆では無くパソコンかも知れないが。

また、ソフト開発の基本ツールであるコンピュータ類や開発技法は年々進歩し、これを誰でもが容易に利用出来る。後発者には、過去に纏わるしがらみが無いので、先発者より新しい道具立てをフルに活用出来るメリットがある。

インドや中国のソフト産業が瞬く間に成長、発展を遂げている現状は、ソフト開発における後発優位の可能性を如実に物語っている。

要するに、やる気さえあれば誰でも、さしたる投資も要らずに始められると云う事である。

（２）全ては人次第

ソフトウエア開発は、「もの（ハード）づくり」の場合の設計作業にあたる。これによって何か新たな価値が創造されるか、新たな機能などが付加されなければ設計の意味はない。その出来映えは、従事した人のセンスとモチベーションに全てが懸かってくる。

ソフトウエア開発の成否は、従事する人次第という面が非常に強く、このため従事者の躾、処遇、教育更にはメンタルケアーなどといったファクターが生産性に極めて大きな影響を及ぼす。こうした観点から、開発現場には次の点が重要である。

（やり甲斐を共有出来る職場風土）

リーダーの下、十分な統率が取られている前提で、職場は風通しが良く、職員個々は自由闊達に意見交換をし合い、常に向上意欲が持続されるよう配意工夫がなされている。

（技術、ノウハウが組織に蓄積し成長出来る仕組み）

職員個々人の経験や成果が組織を成長させ、成長した組織が職員の成長を助ける。職員と組織が相互に交絡を重ねながら発展を遂げられるような仕組みが構築されている。

我が国に置いては、以上のような環境下でソフトウエアが取り扱われているケースは極めて稀である。殆どの場合は、後で述べるような多重下請け構造の中で処理され、現場は３Ｋなどと言われる惨憺たる状況である。

戦後の荒廃から、見事にハードを中心とした工業立国を果たした日本の国民性を考えると、ソフト産業を成功に導けない筈がない。

（３）ソフトウエアは生き続ける

一度ソフトウエアが社会インフラのようなシステムの中に組み込まれると、そのシステムが存在する限りソフトウエアは成長を重ねながら生き続ける。例えば、銀行におけるコンピューターシステムを考えれば一目瞭然で、当初一部門に導入されたソフトウエアは順次全部門に広がり、更には、取引先をカバーしたトータルなソフトウエアシステムへと成長し、事業運営の全てが完全にソフトウエアに依存するようになる。

ソフトウエアシステムの場合、最初の開発はほんの始まりで、それを如何に育て維持管理して行くかが本番で、実は、ここが大問題である。
なお、ソフトウエアは、ハードウエアと異なり、経年劣化が無い。欠陥個所を順次修正して行けば、益々堅牢なものになって行く。会計処理上、ソフト資産を無形固定資産として原価償却を行っているが、この辺りを観ても、ソフトウエアに対する社会・経済的基本認識が如何に未熟であるかが分かる。

２．　ソフトウエアを取り巻く問題

２１世紀は、ソフトウエアがある意味で世の中を支配する時代になる事は、誰もが疑う余地は無いと思うが、それに対する認識の度合いに、極めて問題がある。
昨今、年金問題等ソフトウエアへの十分な対応を怠った為に生じたトラブルが社会問題に発展したが、今世紀は、安心、安全がソフトウエアに良くも悪くも依存する時代になる。
これについては、ソフトウエアに直接従事する者は大変な危機感を持っているが、利用者側の、特にリーダー層の認識は、極めて甘いと言わざるを得ない。

（１）ソフトウエアを利用する側の問題

ソフトウエアに対する関心は非常に高まっているものの、ソフトウエアの本質に対する理解が極めて不十分であるため、大変始末の悪い事態を招いている。
一例を挙げると、コストをかけず高い機能を要求して新規開発を失敗した例であるとか、レガシーシステムの更改を引き延ばし、かえってそのメンテナンスに法外な費用を掛けているケースなどが、日常茶飯事の如く見受けられる。
ソフトウエアシステムは、先に述べたように、その増殖過程を木目細く管理しないと、何時の間にか無様な継ぎ接ぎだらけの、寸足らずの着物のようなものになってしまい、ちょっとした綻びからバラバラに弾けてしまう危険がある。
特に、社会インフラのようなソフトウエアについては、高い信頼性が要求され、その規模も拡大の一途を辿るので、利用者サイドは、メーカーなど、第三者への完全依存体制から、自分自身で対応出来る体制への脱却を図らなければならない。

（２）ソフトウエアを供給する側の問題

わが国のソフト開発業界は建設業界に類似した多層的な下請け構造を採り、肝心な製造工程（開発作業）は、人材供給を派遣に拠っている。作業者の労務単金を抑えトータルコストの低減を狙っている訳であるが、成功しているとは言い難い。
多層化により、発注者から作業者までの距離が遠くなるため両者間の情報交換が難しく、全体を通したマネージメントも不可能に近い状態に陥る。当然のことながら開発はうまく行かず、やり直しや、動かないコンピューターシステムがゴロゴロしている。
総じて、ソフトウエア開発の現状は、生産性が極めて低く、高コストになっていると言わざるを得ない。
また、開発作業が派遣社員によって行われるため、開発を通して得られる技術成果やノウハウが個々の作業者のものになり、発注サイドや、受注したソフト会社に組織的に蓄積されず、国家的にも技術資産として整然とした形で蓄積されていない。これが、ソフト産業が基幹産業に成りきれない要因にもなって居る。
また、現実的弊害は、人材流動が激しいため開発担当者が何時の間にか所在不明になって、システムメンテナンスがピンチに陥ることである。

最近はオフショアーと称し、案件を一括して外国会社に委託する形態が急増して来ている。最近、外国各社の技術レベルが向上し、人件費が割安のため、初期開発に関しては成功しているケースが多い。しかし、長スパンのソフトライフサイクル全般に亘って如何なるかについては、歴史も浅く今のところ何とも言えない。

また、システム開発を通して発注サイドの機密情報が第三国にオープンになる恐れがあることを考えると、発注するシステムに自ずと限界があるのではないかと思慮される。

対応策（結びに替え）

縷々のべたが、わが国が、ICT に関わる国際戦略を展開するに当たって、わが国に置ける指導者層のソフトウエアに対する認識不足と、ソフト産業自体の脆弱性が大きなネックになるのではないかと危惧するのは、以上の次第からである。

手を拱いている訳には行かない。幸い、先に述べたように、ソフトウエアは全てが人に依存するものであり、人材とモチベーション、それに環境さえ用意すればどうにでもなる。

日本の行政サービスは、縦割りに機能して居り、そのためコンピューターシステムを導入しても互換性がなく、国民は何かの手続きをしようと思うと、それぞれの手続きを扱う役所に出向く事になる恐れがある。

共通番号制度を導入する事が出来れば、税務と社会保障というレベルだけで無く、パスポート、運転免許証、健康保険証、厚生年金手帳、印鑑登録証などあらゆる情報の一元管理と、更に、遠隔操作への対応が可能になる筈である。

このようなシステムを構築し、運営して行くためには、行政システム共通の国家的プラットフォームが必要となるが、その構築は ICT を所轄する総務省の緊急課題と考える。

各種の行政システムは、共通プラットフォームを整備して置き、クラウド上のソフトウエアを使えば、個々のシステム構築は、多重下請け構造の業者などを使わずとも容易に可能で、後のメンテナンスも完全を期せる整然としたものになる筈である。

政府は、管理・監督的行政から一歩踏み出し、新しい現業機関もしくは国営のソフトウエア企業を興し、こうした業務を全て自前で行い、２１世紀を開く ICT 産業の規範と基盤を創って頂きたい。

２０世紀における日本の目覚しい発展は、先にも触れたが工業立国に成功したからに他ならない。また、これに当たっては、ハード産業の米とも云える鉄鋼の生産を国営化し、国が工業の基盤を磐石にした上で、世界に冠たる自動車や造船などの産業を興した事によるものと考える。

翻って２１世紀を展望すると、コンピュータを縦横に駆使した情報産業の世紀と言える。これら産業の米に当たるものはソフトウエアである。しかしながら縷々述べた如くこの分野は現在、極めて心許ない状況である。政府の強力で且つ早急な梃入れを希求する次第である。

ICT に関わる国際戦略を展開するに当たり、前川様のご指摘を考えれば考える程、先ずは、自らの足元を固めなければならないと思うに到った。「急がば、廻れ」ではなかろうか。

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(13)

―『NTT を巡るグローバル環境の変化』日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、そして NTT のグローバル化へ―

元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現　株式会社ハイホーCEO
鈴木　武人

6.5　国際展開

Smart の成功はビジネススクールでの教材になったりして、かなり評判でした。その評判からか、パンギリナン氏へフィリピンの外の幾つかの携帯事業への経営参加、買収の話が来ていました。その中から、成長が期待されるインドンネシアとタイを選んでスタディをしました。

インドネシアのターゲットはリッポテレコムでした。リッポは不動産事業を中心とした華僑財閥で、政治的にも中国と米国の間を繋ぐほどの政治力を持っていました。華僑の間は一種のコミュニティがあるようで、全てがトップダウンです。元を正せば携帯事業にそれ程携った訳でも無い小生ですので、通信事業には出資しない原則を持っていた NOKIA を口説いて共同出資の為の共同スタディを行うと言うこととしました。リッポは先ずジャカルタ市内の高級住宅街に案内し、その中の病院の設備等赴任の際に問題が無い事を示そうとしました。確かに立派な設備でしたが、我々の興味は規制と電波、識字率に有りました。このデータを得るのに若干の時間を要しましたが、問題は規制と電波に有りました。即ちリッポは PHS と同様の 2.4GHz の電波しか割当てられていない市単位毎の携帯会社を買いあさり、全体を纏めてリッポと称していたのです。当時の実質的な規制ではその間の通信は全てインドネシアテレコムを経由する義務があり、その大部分は軍関係が握っている事が浮かび上がりました。即ち、日本の当初の PHS と同様の固定回線の足回りとしての無線サービスで、この様な背景では、長期的な展望を持てば別の観点もありそうでしたが、広い国土を安価にカバーして利益をあげる事は不可能に考えられ、また NOKIA のティームも首を縦に振る事無く、パンギリナン氏に残念な報告をする事となりました。NTT には当時少しでも実行に動きがあれば報告をするつもりでしたが、必要なしとしてしまいました。

インドネシアの話しとは別にパンギリナン氏がタイでの通信事業をやろうと言い出しました。タイの成長力に魅力を感じたのでしょう。当時はタクシン首相がオリジナル事業に携帯通信をあわせて勢力を誇っていた時期にあたります。タクシンの勢力と争わない様に事業を展開すれば良いのではないか、との見解に対し、先ずは NTT が長く実施している TT&T に親しい友人が居るので NTT はこの先タイでどうするかも含めてヒヤリングをしてみる事としました。

6.6　PLDT の内部不正とは

基本的にはオーナーが絶対の権力を握り、会社を私物化していた事が問題の根源でしょう。本社ビル内に専用のスポーツジムを作って、愛人と利用していたとの話しもありました。

現場でも電話架設の際に不正な手間賃を要求する事や、賄賂のように金を払うと早く電話を付ける事等が日常的に行われていたようです。修理に際しても同様で、これらは、いわゆる OB グループが背景に居たとの事で、そのグループと関りの無い責任者に事例を突き止めてもらう事で、案外早く対応が出来たと思っています。

これは内部不正に近いものですが、組織的な不正として、料金滞納者からの料金回収会社の存在が有りました。この回収手数料が 40%にも上り、また其の取扱高が余りにも大きい事から調査した所、そのオーナーが買収前の PLDT のオーナーであることが判り、その契約破棄で対応する事が出来ました。

別のタイプの不正行為：　PLDT はベトナム戦争当時、米軍最大のクラーク空軍基地とスービック海軍基地に AT&T との 50%/50%の合弁会社を運用していました。その後、米軍はピナツボ火山の噴火により使用不能として撤退し、基地は返還されました。当初、基地が経済効果をもたらしていたことから返還には経済的懸念がありましたが、捨て置かれた車両を利用してジープニーを発明して民営交通機関にしたり、広大な米軍基地跡を保税特区として産業誘致を図り、米軍が撤退しても経済が崩壊しないよう図っていました。通信についても PLDT は AT&T との合弁を継続し、海外からの資本が入り易いよう特区内限りの割安国際通信を提供していました。

ある日、競争会社 Globe 社の Ablaza CEO と偶然に行き合った際、『特区の通信会社が正式の国際関門局を経由せずに、割安で国際通信を行っているようだ』と告げられました。調査の結果、それが事実と判明したので、これを中止させようと行動開始した所、直ちに AT&T の社員と現地の部下が米国へ出国してしまいました。彼等は不正に稼いだ金の一部を抜いて横領して持ち去った様です。この問題の解決の為、AT&T からの着信料金による債権を用いてその持分を買い取って合弁を解消する事としました。ただ、これが FBI に追われる身となる原因となるとは其のときは想像しませんでした。この詳細は『怖かった話』として後述します。

6.7　PLDT プロジェクトの意味と NTT とのシナジー

国際通信事業には海底ケーブルが必須です。NTT は国際通信事業の当初は第 2 種事業者としてケーブルを持たずに、レンタルした形で通信サービスを開始しました。当然、レンタル費用が高価で採算の取れる状況にはなりませんでした。自前でケーブルを持つ必要がありましたが、その建設には長い時間を要します。別の手段としてケーブル容量を持った会社、具体的には IDC を買収する方法が検討、交渉されていました。しかしながら、IDC のネットワークの広がりが不十分であることや、C&W によるオファーが当初計画していた額よりも高額であった事から NTT は断念せざるを得なかったと理解しています。そこで長い歴史とプレゼンスを持つ PLDT に出資する案が代替として浮上しました。多くの海底ケーブルプロジェクトでは、出資者間の合意として 14%以上の株を持つ会社はアライアンスとして認め、その所有する容量を出資時の原価で転売できるという合意があります。従って、NTT が PLDT の株を 14%以上持つ事によりアライアンスの関

係と認められ、PLDT を通じて国際通信事業に必要な海底線容量を原価で取得する事が出来ます。したがって、Smart に持っていた株を PLDT に売却し、14%以上になるようにこれに上乗せ出資したのです。

また、その後の意義、シナジーですが、PLDT 側も法人営業事業を立ち上げた事から、アジア進出を図る多くの企業に NTTCom の ArcStar サービスの差別化の上で有利に働きました。アジアの多くの国では回線品質上の問題があり、フィリピンも島国で台風や火山、地震がある事から同様であるものの、顧客からすれば現地の統制が効くことが大きなメリットであり、また PLDT の職員も最優先で取り組む事から、現地工場の責任者から種々感謝を頂く様になっています。

通信事情の改善、時差の少なく近い立地、また英語が通じる等の事から、企業の規模に拘わらず、フィリピンに進出を決めた企業が多いのです。

携帯通信事業も NTTCom から Docomo が半分購入後に増資を得た後、一時 i-Mode を導入してみたものの、使用できる端末機が NEC 1 社のものに限られたり、またスマートフォンの普及により、結果的にローミングアライアンスによるシナジーに限られているようですが、増資も経て、NY に上場する同国唯一の優良企業として毎年高額(百億円内外)の配当を NTT グループにもたらしています。

尚、2016 年の PLDT の Market Cap.は $10B.程で NTT の 10%程度となっています。

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/

海外グラフィティ

「酒と旅と人生と」を読んで

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

タイトルは名随筆家、佐々木久子のエッセイ集である。若いときに読んだものと別物のような気がする。自分が経てきた人生経験と国内出張で各地を旅した時間の積み重ねが、同じ文章を感じる厚みの差なのだろうか？

かつて公営競技に関連する企業の経営者だったが、社内的に「観光は厳禁」という文化をぶち壊し、「必ず観光し、その街の人とその土地の話をするように」と方針変更をした。すると、話題の広がりとともに、仕事にも良い方向に跳ね返ってきた。佐々木久子自身も、「地方に行ったら、その土地の日本酒と酒の肴を味わうべし」と薦めている。

印象に残っているのは、金沢の居酒屋と一流料亭「太郎」である。金沢もかつて滞在していた３０年前と段違いの変わりようだ。名前は忘れたが、駅前の居酒屋のメニューの数の多さだ。「ノドグロ」の刺身のうまさは本当にすごい。

金沢の主計町にある「日本一の鍋料理屋・太郎」のだし汁が絶妙な味わいをみせている。作家の五木寛之も愛好する料亭だそうだ。金沢は加賀百万石の城下町で、能、狂言、金箔、加賀友禅、九谷焼、輪島塗などその文化的背景が何とも重厚である。

金沢在勤中、課の忘年会をやろう、そうだ、有名な太郎でということになった。総勢１５名ほど。酔うほどに歌も出て賑やかになった。そう、以前はカラオケなどなくて、十八番の持ち歌を皆が披露する。富山は富山、福井は福井、石川は石川。誠に楽しい宴会であった。だが、あとがいけない。店の女将が「最近の電電の方は元気いっぱいですね」とチクリ。

四国徳島の出張も楽しみだった。駅前の、板前がすこぶる愛想が悪い、小さな料理屋だが、「和食のコース」が絶品だった。たしか、酒は「ゆず」がふんだんにはいった実にすっきりした酒だった。

各地の日本酒ほどしっとり日本人に合うものはない。地方、地方で、独特の味わいがある。ロシアのサハリンで飲んだウォッカ、７０度で燃える。ブラジルのピンガー、メキシコのテキーラなど、ただやたらと強いが、こんな類の酒は、やはり焼肉としか合わない。但し、毎晩の晩酌で飲み続けるスコッチのシーバスリーガルは例外である。ＮＴＴ国際部で世界中飛び歩いているとき、ビジネスクラスの英国航空で出たのがこの酒。それ以来病みつきで、同じくＫＬＭで提供された「ハイネケンビール」も欠かせない。

佐々木久子は、広島市出身。自宅が爆心地の近くで、被爆している。実は、私自身の本籍地のすぐ近くなのも何かの縁である。昭和三十年五月から「雑誌・酒」の編集人兼発行人であり、熱烈なカープファンでもあった。

エッセイは酒の話ばかりではない。「“仕事”この苦しき努力よ」では、「働いている男の姿は、最も魅力ある姿だ。反対に、自分の仕事に不平や不満、愚痴ばかり言って、要領よくさぼっている男。こんな男は、まったくくだらない。」と切り捨てている。恋人はいたらしいが一生涯独身。佐々木久子がなにか「侍」に思えてきた。ご一読乞う。（完）

「ベトナム残留日本兵家族の旅」を観て

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

涙を禁じ得ないドキュメンタリーだった。ベトナムの主にハノイで通算半年に渡り勤務した。南のホーチミン（旧サイゴン）はアメリカナイズされていたが、北のハノイは旧宗主国のフランスの面影を残す風雅な街だ。テレジアンイエローの趣のある黄色い壁の官庁街は、ふと、１９世紀にタイムスリップしたような錯覚を覚える。

第二次大戦中、旧日本軍のおよそ数百名はベトナムに残留、ディエンビエンフーなどの激戦地でフランス軍と戦った。その日本兵とベトナム女性との間に生まれた子孫が、父の故国日本を訪れ、日本の家族と交流を深めるドキュメンタリーだ。独立戦争は勝ったが、ベトナムが共産圏に入ったため、残留日本兵は“敵国日本”ということで、今度は日本に単独で強制送還、家族は残された。ベトナムは中国文化の色濃く残る国で、家系はあくまで、父方が「内」で母方は「外」である。したがって、子孫の祖国はあくまで日本なのだ。

縁あって、祖国日本へ異母弟などに会う旅に恵まれた子孫は、或は生存する実の父、弟或は叔母などと会うことになったのだ。

子孫の旅行地は、家族が判明している人は、或は金沢、静岡で、そして、父親たちが故国の土の第一歩を踏み出した舞鶴港であった。かつて父達が降り立ったその港は感慨無量のようだった。このことは、自身の体験に通ずる。それは、ビジネスで上海を訪れた際、戦時中彼の地をこよなく愛した父を思い浮かべたからだ。さらには、彼らは、二葉百合子の「岸壁の母」に日本人と共に涙を流す。

私が滞在したころのハノイはまだ資本主義に慣れていない土地であった。利子やローンという経済用語は、なかなか理解してもらえず、説明に四苦八苦した。外国語のなかでも、英語があまり浸透しておらず、フランス語やロシア語の方が幅を利かせていた。そのくせ、ホテル代は１泊７０ドルと偉く高かった。メコンの上流の地で、冬はなかなか寒く、だだっ広い会議室で交渉していても、足元からゾクゾク寒気が上がってくる。一計を案じ、パジャマを穿いて、そのうえからズボンをさらに重ねるという寒さ対策をした。

トイレに行き、手を洗うための石鹸は、粗悪で強烈な匂いがした。オフィスに戻っても他人が「ああトイレ帰りだな」と気が付くほどだった。お客にはお茶菓子は無く、ミカンが１個必ず添えられていた。確かに、パンは硬く、コーヒーは苦かった。我々が訪れるひと昔前の日本人ジャーリストの表現をいまだに思い出す。「木槌のようなパンを食べ、せんぶりのようなコーヒーを飲み」と。食事はよくホーを食べた。日本のうどんとよく似ている。勤勉で日本人とも顔もよく似ている。滞在中、様々な不自由は感じたが、それでもベトナムは大好きだった。終戦直後の日本を知っている自分にとって、かの国に強烈ななつかしさを感じさせた。テレビのドキュメンタリーを観ている間中、涙が溢れて止まらなかった。何故か？登場するプレーヤーはベトナム人なのに、昔の日本人がそこにはいた。

宮沢賢治と俳句

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

童話作家賢治、詩人作家賢治は同時に短歌作家でもあった。ちくま文庫宮沢賢治全集３には、文学としての出発点である短歌がかなりの部分を占めている。盛岡中学から盛岡高等農林の学生時代そして研究生時代の十二年間で相当な数に上る。

それでは、俳句はというと解説者の言葉を借りれば、「晩年にわずかに手すさびのように、書き遺された」。収録されたものもいたって少ない。なかで目を引くのは、菊に関する数点で以下のものである。

・たそがれてなまめく菊のけはひかな
・夜となりて他国の菊もかをりけり
・花はみな四方に贈りて菊日和

昭和七年十月に花巻で開かれた菊花品評会に寄せるために作られたと言われている。

ただ、多少私が興味をひかれたのは、俳句の次に収録されている連句のなかで、およそ賢治らしからぬ色気を感じる次の作品だ。

・どど一を芸者に書かす団扇かな
・三味線の皮に狂ひや五月雨

石部金吉・賢治らしからぬこの感性である。さらに、これらの句が書かれたペーパーが、(「東北砕石工場花巻出張所」用箋）なのだ。幼いころから石集めが好きで「石っこ賢さん」と綽名され、働くのが嫌で嫌で、特に家業の質屋を継がずに逃げ回っていた。唯一サラリーマンを経験したのが「石灰岩のセールスマン」でその勤務先が「東北砕石工場花巻出張所」であった。

第１５８回直木賞は門井　慶喜氏の「銀河鉄道の父」である。従来、賢治本人はもちろん、世に出ている人物としては、弟で、結局家業の質屋を継いだ清六さん、それと、「永訣の朝」という詩で有名な、愛してやまなかった妹のトシであって、賢治のわがままの全てを許した政次郎に切り込んだ作家は誰一人としていなかった。この点で、作品としては大成功している。

私の本棚は、宮沢賢治の全集、エッセイ、評論で埋め尽くされ、宮沢賢治語彙辞典まで所有している。いわば正真正銘の賢治マニアである。食い扶持を稼がずとも、勝手気ままに寛大で、無償の愛で包み込み、賢治を生かし続けた父のおかげで、恐ろしい語彙力が賢治のなかで培われた。宮沢賢治語彙辞典を編纂した原　子朗さんは、賢治の事を百科全書的詩人と呼んでいる。天文、気象、地学、歴史、習俗、方言、地名、哲学、宗教、農業、化学、美術、音楽、文学、宗教など実に多面的である。

「たられば」ではないが、もし、賢治が童話や詩に費やす時間の十分の一でも俳句にエネルギーを費やしていれば、詩集「春と修羅」や童話「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」並みの優れたものをこの世に残していただろう。(完)

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/

海外便り

ノルウェー俳柳紀行(3)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

フィヨルドに集う観光グローバル化

直（す）ぐ分かるブランド傘の落し主

観光列車を乗り継いで乗船地のフロムへ、車内は世界各国のお客さんで大変賑やか。欧州か南米か分からないがスペイン語が陽気にはしゃぐ、するとシンガポール人がそれに合わせて英語で応じる。狭い車内は何語でもよい、大いにおしゃべりして国際交流が進む。私達の前に座った年配のご夫婦はもの静かな二人、それぞれカメラで写真を撮りまくる。マダムの方が幾らか積極的か、傑作を亭主に見せて得意気である。わが方も同じように婆が爺に写真の成果を誇る。前席の二人の会話はドイツ語、お互い人生一期一会のフィヨルド観光、野暮な言葉かけは自粛して、彼等とはただ笑顔の交歓で話をする。

フロム鉄道瀧見の駅　瀧の飛沫でずぶ濡れ　フィヨルドクルーズ　峡湾絶壁下の住家

思っていたより大型のフェリーに乗って 2 時間のフィヨルド・クルーズに出る。トップデッキの最後尾に陣取り、移り行く峡谷を眺めながら日向ぼっこの船旅を楽しむ。すぐ隣には高校生位の孫娘と二人で来たという祖母が、同じように自然美に興奮しながら写真を撮りまくり、おしゃべりをして楽しいひと時を過ごす。この二人はセルビア人、若祖母は英語も達者でよくしゃべる。若さと元気の秘訣は誰彼かまわず話を交わすことにあるらしい。

バスでヴォスへ　　随所に白滝奔流　　ベルゲン港　　ベルゲン駅

ソグネフィヨルドにはミーハー観光客が多い。当然ながら日本人ツアー客も混じっている。私のすぐ後ろで屯んでいた中高年オバン、後ろに目がないので分からないが話している内容から横浜辺りから来たらしい。そのうち話し声が聞こえなくなって、空いたスペースを見るとバーバリーの折りたたみ傘が落ちている。他にもいろんな国籍の人がいたが、ブランド物を持ち歩くなんて日本人以外にはおるまい。義侠心が湧いてきて船上のツアー客数人に心当たりを尋ねてみる。ツアーは旅行エージェント 1 社だけではない。幾社かの混成群のようだ。ある年配男性は「我々のグループは 25 人位、それも出会

ってから未だ三日目、仲間がどこの誰かも定かでない」という。でも私とて持ち主の知れぬ傘をいつまでも持っているわけにはいかない。結局、責任感もありそうな彼に、「だめなら貴方が頂けばよいから、添乗員はじめ皆さんに当たってみてください」と半ば強制的にお願いする。これでババ抜きのババが無くなった。元の優雅な船旅に戻れる。かなり時間が経ってから一人の女性が現れ「有難うございました」、「よかったですね」。これで当方もすっきりした。下船のとき再び礼を云われて別れる。

絶壁上 教誨(きょうかい) 台(だい) に身震いす

たまたまのめり込む絶景 一生一会(いっしょういちえ)

リーセ絶壁大阪ハルカス２倍超え

大阪の地上 300m「あべのハルカス」、ビル頂上外縁を実際に歩いてスリルを味わう余興がある。近鉄不動産が企む「エッジ・ザ・ハルカス」、それより高いリーセフィヨルドのプレーケストーレンは「教会の説教壇」とも言われ、水面からそそり立つ 600m の断崖絶壁上にある。まさに３Ｔ(Thrill、Terrible、Tremble)の極みかな。怖いけど覗いて見たいゾクゾク感、女はいざ知らず男は玉がめり込むようなスリルがある。それがリーセフィヨルドの魅力である。今回のノルウェー旅行最大の目玉、ために今までとは違って初めてトレッキングシューズを履いての旅となった。家内は道中暑いのでサンダル履きだったのを、満を持してキャラバンシューズに履き替えて臨む。実際、その雄大な自然の造形美は、人智を超える最高の達成感を与えてくれた。もはや二度とは来ない一期一会の天からの贈り物である。

教誨へアプローチ険し試練かな

愛用 帽(ぼう) プレーケストーレン厄落とし

スタヴァンゲルへフェリー

海底トンネル

橋梁

旧市街民家のガーデン

プレーケストーレンへのベースキャンプはノルウェー第４の都市スタヴァンゲルである。まずフェリーでリーセフィヨルドの玄関口ともいえるタウに渡り、さらにバスでプレーケストール・ヒュッテへ、ここからは人力で山道へ入る。片道 3.8 ㎞のアップダウン、登山道は整備されているとは云え、急こう配の岩場が多くきつい。でも所々に沼沢や木道もあり、エニシダ、山桜などの野草や木々の花々を愛でつつ、汗を掻きながらひたすら目的地を目指す。約２時間のトレッキングの末ようやく教誨台へ辿り着く。大勢の人が凡そ 25m 四方からなる一枚岩の上で思い思いに稀有な体験を楽しんでいる。我に返ってふと気がつけば、登り始めたとき被っていた帽子が無い。途中でバッグに仕舞った記憶はあるがハッキリしない。どうも途中の休憩で落としてきたようだ。皮肉にも教誨台で「注意怠りなく、物失くす勿れ」と諭される。帰路、あらためて休憩場所に寄る

も見当たらず、旅の厄落としと諦めることにした。ソグネフィヨルドでは他人の落とし物の雨傘を届けて上げたのに、神様は何と無慈悲なお方かしら。それとも爺臭さを脱した新帽子に買い替えなさいとのお告げかも。

飛び滑り冬のノルウェーに日本人
海山にスポーツ天国二毛作
一年を優雅に生きるセレブ人

ノルウェーはスキー王国、今冬の複合競技では渡部暁斗選手が奮戦大活躍した。しかし他の種目、とりわけクロスカントリーやジャンプでノルウェー選手に勝つことは難しい。40 年前オスロを訪れた時、郊外のホルメンコーレン・ジャンプ場に足を運んだ。立派なジャンプ台があった。1972 年札幌オリンピックで日の丸飛行隊と揶揄された笠谷幸生、金野昭次、青池清二の 3 選手が、男子ノーマルヒルで 1～3 位を独占した。その時代彼等がノルウェーでも飛んだ本場のジャンプ場を一目見ようと訪れた次第。それから 40 年以上が過ぎて今やホルメンコーレン一帯はノルディックスキー施設のメッカになっている。その後も名誉あるホルメンコーレン・メダル受賞者に荻原健司(1995)、舟木和喜(1999)、葛西紀明(2016)、高梨沙羅(2017)の日本人が名を連ねる。

一年の 3 分の 2 はスキーができ、そして残る 3 分の 1 はヨットや自転車ロードレースなど海山にアスリートが跋扈する。老若男女が夏冬(春秋はない)の大自然の中で縦横無尽に躍動する。さすがヴァイキングの末裔である。この限りにおいてノルウェーは豪気で冒険心を満たすに足る最高の環境を持する国である。(次号に続く)

プレーケストーレン

岩場

大型犬が多い

鳥サンドと欠食爺

＜事務局注＞ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/

談話会の話、あれこれ

第 42 回海外情報談話会模様

事務局

第 42 回海外情報談話会が 2019 年 12 月 11 日(水)15 時～17 時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室において開催された。講師は高橋　謙三様(電気通信大学国際戦略室客員教授、マレーシア・マルチメディア大学兼任教授、元 NTT 通信網総合研究所)、演題は「大学における国際協力活動（アジア・欧米・中南米)」であり、国際協力に関する大学の役割、文科省の方針、世界の人口と大学の国際化、電気通信大学(UEC)の具体例、さくらサイエンスプラン、留学生の状況など幅広く、かつ熱い思いが伝わる話であった。当会はいつでも質問できる雰囲気で実施しているが、今回初めて質問票を配布したところ、シャイな参加者が多かったのか、質問票も複数提出され、従来以上に活発な会となった。

以下にいくつかの話題を列挙する。

・大学の国際協力としては、高度人材育成国際協業(短期派遣、短期受け入れ、長期留学)、共同研究開発、プロジェクト受託が中心である。
・文科省は国際協力のための基盤づくりとして、①国際援助機関で活躍する人を講師とした講演会(→学生の理解を深める)、②大学と国際援助機関の人物交流(→トップ間人脈形成)、③国際援助機関等からの国際協力に関する情報共有(→協力案件に関する学内リソースの整備)、などを進めている。
・少子高齢化に伴い、大学教育のグローバル化とインパクトファクターの高い研究が必要となっている。
・大学のグローバル化として、スーパーグローバル大学創成支援、大学の世界展開力強化事業、短期留学生交流支援、長期留学生支援などがある。
・大学の世界展開力強化事業は文科省主管、日本学術振興会(JSPS)主催で毎年公募しており、UEC も東京外大、東京農工大と連携し、中南米等の大学との間で文理協働型人材育成を実施した。
・短期留学生交流支援にはトビタテ留学ジャパン、日本留学生支援機構(JASSO)協定派遣、JASSO 協定受入がある。UEC の大学推薦派遣先は米国、中国、タイ、マレーシア、シンガポール、メキシコ、ベルギーなどの各国に渡り、派遣期間は 3 ヶ月以内である。
・さくらサイエンスプランは、産学官の連携の下、科学技術振興機構(JST)事業として、アジアなどの若者を日本に招聘し、日本の科学技術を体験させる事業であり、2014 年のスタートから 5 年間で約 26,000 人を招聘した。競争率が激しい中、UEC はほぼ毎年、このプロジェクトを受託し、UEC による招聘者の数は増加傾向にある。
・さくらサイエンスプランには日本に関心の深い学生が参加し、帰国後、日本に好意的な活動をすることが多い。
・UEC では、留学、国際インターンシップ、グローバル活動拠点、グローバル教育などを実施している。留学生は 267 名で、在籍学生総数 4,831 名の 5.5%程度である。国別では中国が半数以上を占めている。
・米国のビザ取りには半年くらいかかるなどの苦労がある。

・各国の大学と互恵的な関係維持に努めている。
・JICA 専門家として派遣されたマレーシア・マルチメディア大学とは今も関係維持しており、ホームページにも掲載されている。
・マハティール首相が前回首相当時に、同首相に対して遠隔教育のプレゼンをした写真が残っているが、忘れがたい想い出である。

＜事務局注＞講演資料は、講師のご厚意により、下記サイトからダウンロードすることができます。　https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 89 号を発行することができました。今回は新たに「日本人なら、古事記を読もう！」のご寄稿があり、また徒然日記が再開されるとともに、海外実践マネジメント、海外グラフィティ、海外便りも継続しており、誠にありがとうございます。皆様からのさらなるご寄稿をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)